

関西学院大学大学院理工学研究科

2025 年度入学試験

(一次：2024 年 8 月 2 日実施)

専門科目

建築学専攻

計画・歴史系(論文論述)

(13:10-15:10 120 分)

【試験にあたっての注意】

1. 筆記用具以外はカバンに入れ、カバンは床の上に置くこと。
2. 携帯電話、スマートフォン、ウェアラブル端末、音楽プレーヤー等の音の出る機器の電源を切ること。
なお、アラームを設定している人は解除してから電源を切り、カバンにしまうこと。
3. 時計のアラームは解除すること。携帯電話を時計として使用することは認めない。
4. 試験の途中退場は認めない。ただし、やむを得ない場合は挙手し監督者に知らせること。
5. 不審な言動は慎むこと。不正行為が発覚した場合、全科目を0点とする。
6. 試験用紙は以下の構成となっている。
 - ① 問題冊子1冊
 - ② 選択問題調査書、解答用紙
7. 指示があるまで問題冊子および解答用紙を開かないこと。
8. 解答用紙のホチキスは、はずさないこと（提出時もホチキス留めのまま提出すること）。
9. 各問題は、所定の解答用紙に解答すること。
10. 解答にあたっては、問題冊子および解答用紙に書かれた注意に従うこと。
11. 解答用紙には、氏名は記入せず、受験番号のみを記入すること。
12. 原則、解答用紙の裏面使用は不可。やむを得ず解答欄が不足する場合は<裏面に続く>と記載することで、裏面への記載を認める。
13. 試験終了後、問題冊子は各自持ち帰ること。

以上

[建築学専攻（専門科目「計画・歴史系」）]

4題から2題を選択し、解答用紙に添付された選択問題調査書の所定欄に、選択・解答する問題を○で囲むこと。

問題1題につき解答用紙1枚を使用すること。

2024 年度 建築学専攻 専門科目「計画・歴史系」小論文

以下の以下4題のうちから2題を選択し解答すること
解答用紙(B4用紙)を用い、1題につき1枚に解答すること。
(解答は文章と図やイラストを用いても良い)

問題 1

(1) 日本建築における書院造の成立について、以下のキーワードを用いながら、その歴史的経緯を説明しなさい。
なお、文中のキーワードには下線を引くこと。

寝殿造／武家住宅／中門／会所／上段／畳／座敷飾／押板／棚／付書院／匠明／
昔六間七間主殿図／園城寺光浄院客殿／当代広間図／聚楽第大広間／江戸城大広間

(2) 書院造に関連して、桃山時代までの「押板」と江戸初期の「トコノマ(床の間)」のそれぞれの特徴と違いを説明した上で、その変遷について、以下のキーワードを用いながら説明しなさい。なお、文中のキーワードには下線を引くこと。

匠明／園城寺光浄院客殿／三溪園臨春閣(旧紀州巖出御殿)／東山殿会所石山間／村田珠光
／茶室／四畳半／上段／床框

問題 2

(1) 博物館・美術館の発展と展開に関して、以下の用語をすべて用い説明しなさい。なお、文中の以下の用語には下線を引くこと。

ムーセイオン／ウフィツィ美術館／ルーブル美術館／北方民族博物館／成長する美術館／ニューヨーク近代美術館／ソロモン R. グッゲンハイム美術館／ベルリン新国立美術館／国立民族学博物館／接室巡回形式／廊下接続形式／ホール接続形式

(2) 近年の博物館・美術館計画の動向として、どのような観点が重視されたり、どのような可能性の探究が目指されたりしているかについて、以下の用語をすべて用い記述し、また、これからの博物館・美術館の建築計画的な可能性について、あなたの考えを述べなさい。なお、文中の以下の用語には下線を引くこと。

金沢 21 世紀美術館／国立新美術館／ベネッセアートサイト直島／ビルバオ・グッゲンハイム美術館／大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ／エコ・ミュージアム

問題 3

(1)土地区画整理事業について、その事業の仕組みを説明し、「換地」と「減歩」の手法が土地所有者にもたらす影響を述べなさい。

(2)以下の図は土地区画整理事業を活用した事例である。

この事業により期待される効果を述べなさい。また、A に誘致する施設を提案し、その施設ができることでどのように地域を向上させることができるのか述べなさい。

※国土交通省ホームページより引用 一部修正

(図は、著作権の関係により、公開しません。)

問題 4

『アメリカ大都市の死と生』におけるジェイン・ジェイコブズの主張を詳述せよ。

そのうえで、21 世紀のまちづくりにとって参考になる点と、彼女の理論の限界点について自身の考えを論理的に述べよ。

以上

出題意図

- ・ 建築計画、建築史・都市史、都市計画やまちづくりに関する専門的な知識を確認する。
- ・ 建築様式やビルディングタイプの特徴およびその成立の経緯や歴史的背景に関する理解度を確認する。
- ・ それらを暗記するだけでなく、自分の意見を交えて論述する力を確認する。
- ・ 古典的著作などを踏まえ、今後の都市計画やまちづくりに活かすための提案力を確認する。

問題 1

(1)

書院造は、近世初期に完成した武家住宅の様式であり、「書院造」という用語は、沢田名垂『家屋雑考』(天保 13/1842) に初出する。

中世の武家住宅は、古代の寝殿造をその原型とし、寝殿と中門廊を中心とした部分を残して簡略化されたものと考えられている。室町時代になると、寝殿と続く別棟として会所と呼ばれる独立した接客空間が設けられるようになる。寝殿造では基本的に自分より身分の高い人を自宅に迎えることはなかったが、武家住宅においては自分より身分の高い人を迎える機会もあり、来客のために最上の設備をした部屋を設けたのである。このような会所の例として室町幕府六代将軍足利義教の室町北小路殿の会所が知られる。

寝殿造では、板敷の上に畳を置き、畳の大きさ、縁などで身分の差を表現していたが、室町時代後半以降、床に畳が敷き詰められるようになると、畳の種類による格式の差が表現できなくなり、貴人の座の位置を高くするようになり、上段が発生することとなった。このような会所における上段の設置が書院造における上段の形成につながった。

室内装飾の点では、室町時代に、中国から輸入され唐物名物と呼ばれた宋・元時代の掛軸、各種工芸品等が観賞用の品として上流階層に珍重され、それらの名物を飾るため座敷飾と呼ばれる新たな室内施設が発生することとなった。一つは押板で、掛軸を常時懸けておくために、壁を一尺ほど凹ませ、下に厚い板を造り付けにしたものであり、掛軸(絵)の前に置く花瓶、香炉、燭台などを載せるためのものであった。板敷の間においては必ずしも押板は造りつけでなくてもよかったが、畳敷の間では、畳の上に板を置くのは不格好と見なされ、造りつけになったとされる。二つ目は棚であり、唐物の工芸品を並べる装飾品のための棚であった。初期は移動式であったが、後に壁に固定されるようになった。三つ目は付書院で、書齋における机(出文机)が造り付けになったものであり、筆、墨、硯などの文房具を飾る場所でもあった。後の書院造では、付書院は完全に装飾的なものとなる。これらの座敷飾は室町期には一カ所に集められてはおらず、桃山期以降の書院造において一カ所に集められ、かぎの手に並べられる一定の配置となる。

上記のような変遷を経て、床・棚・書院(付書院)と、寝殿造りににおける寝室の名残とされる帳台構および上段を一つの空間にまとめあげた書院造が桃山時代に確立されたと考えられている。江戸幕府の大棟梁平内家に伝わる木割書である『匠明』(1608 著)に描かれた「昔六間七間主殿図」の主室には、

西壁に床と棚があり、北側は納戸との間に帳台構（納戸構）が設けられた上段が描かれ、南の広縁側に上段が延び、付書院が設置されている。この図とほぼ同じ形式を持つのが園城寺光浄院客殿（1601 築）で、この頃に書院造の形式が確立されたと考えられている。

『匠明』には「当代広間図」と呼ばれる図面も描かれており、「昔六間七間主殿図」では二列型であった平面が、三列型に拡張し、上段の間が入口から入って折れ曲がったところに配置される形で描かれている。広間とは秀吉の聚楽第において広く作られた主殿を広間と呼ぶようになりそれが広まったものと書かれ、聚楽第大広間（1587 築）は当代広間図と同様三列型の平面であった。江戸城大広間は当代広間図と同様、上段の間が入口から入って折れ曲がったところに配置された平面となっており、床、棚、書院を備えた上段の前に中段、下段の間を設け、主人の座を奥ませることで荘重観を演出し、対面の格式化を推し進める構成になっている。

（2）

桃山時代までの押板は奥行が浅く間口が広いのが特徴で、古いものは厚い板を畳から 20～30 cm 程上に入れた形が一般的であった。園城寺光浄院客殿（1601）などがそうした例である。

江戸初期に見られるようになったトコノマは、幅が一間から一間半で奥行が三尺（約 90 cm）程度、畳のすぐ上に床框とこがまが置かれ、その奥に畳や薄い板が入れられるのが特徴で、桂離宮古書院（元和末）、三溪園臨春閣（旧紀州巖出御殿／1649）などがそうした例である。

『匠明』（1608 著）において、押板を「トコ」とする記述があり、慶長期（1596-1615）頃に押板からトコへの変化があったと考えられる。

トコノマの源流は茶室にあるとされる。『南方録』に書かれた村田珠光の四畳半茶室には「一間床也」の記述がある。足利義政の私室であった東山殿会所石山間には、八畳敷に一畳半の上段、押板、棚、付書院が備えられていた。その八畳を四畳半に縮小し、一畳半の上段を一畳にし、押板の奥行をなくし、棚、付書院をとり、炉を切ることで四畳半茶室が成立したとされる。茶室が上段つきの座敷を縮小することで成立したという経緯から、茶室のトコは座敷の上段を縮小し、押板を略したものと解釈できる。

小さな茶室にまで上段が残った理由は、東山時代（15 世紀後半）の茶は控の間どうぼうしゅうにいる同朋衆によって点てられ貴人が飲むという形であり、茶室には貴人の座が必要であったためである。床框が漆塗りなのは、上段の框であったことの証左であると考えられている。

茶室は当初茶人によって設計され、利休が数寄屋と呼んだ草庵風茶室の展開が見られたが、江戸期になると大工が設計するようになり茶室の木割書も書かれるようになる。『匠明』には茶の後の宴会に使う部屋として、「スキヤ」に続く「クサリノ間」、「書院」の記述があり、江戸初期には茶室の影響を受けた数寄屋風書院造が形成され、正式の接客空間である「広間」ではなく、私的な接客空間や別荘などに用いられるようになった。

問題 2

(1)

博物館、美術館を指すミュージアムという用語は、ギリシア神話において芸術・学問を司る 9 人の女神ミューズ神に由来する。ミューズ神（ギリシア語でムーサイ（複数形））を祀る聖所をムーセイオン Museion といい、やがて学堂として発展し、古代ヘレニズム世界、古代ローマ世界の各所に建てられた。BC4 世紀末、プトレマイオス朝エジプトのプトレマイオス 1 世がアレクサンドリアに設立したムーセイオンが有名だが、それは博物館というより研究施設であり展示は付加的なものにすぎなかったと考えられている。

ルネサンス期には王侯貴族が美術品などの収集に努め邸館に所蔵した。フィレンツェではメディチ家が建設した官庁建築（ウフィツィ uffizi=office）内に、メディチ家所蔵の古代彫刻などが収容、展示された。1591 年からは部分的に公開されるようになったこのウフィツィ美術館は、ヨーロッパ最古の近代的美術館の一つとして知られる。

フランス革命下の 1793 年、ルーブル宮殿が所蔵美術品とともに一般に無料で公開される形で設立されたルーブル美術館は、その後ヨーロッパ各国で宮廷博物館を一般公開し、公共の博物館を建設する契機となった。博物館は王侯貴族の個人的な愛好、趣味を披露する場ではなく、社会的、公共的性格を持つ社会教育の施設であるという目的が明確になった。そして産業革命期には、自然科学、工学の急速な発達により、資料収集、保管、研究、整理、展示の各機能において科学性が打ち出され、学術研究が博物館の目的の一つとして明確に意識されるようになった。

19 世紀になると、博物館・美術館専用の建築が建てられるようになった。初期の博物館・美術館では展示室をつないで入館者の動線をつくる接室巡回形式（一筆書型）のプランが一般的であったが、どこか一室を閉じると使用できなくなることで、展示内容の異なる展覧会を並行して開催することができないことなどの短所もあった。1873 年にストックホルムに開設し、1907 年に建てられた北方民族博物館は、中央ホールを置きホールに各展示室を接続するホール接続形式（中央ホール型）のプランで設計され、ホールから展示室への動線にフレキシビリティがあるため、展示室を一部閉じることが可能であり、内容の異なる展示を並行して開催することが容易であるなど、接室巡回形式の欠点を補う平面計画がなされた。また、大規模な博物館・美術館では、展示室をホールに接続する形式では来場者を処理しきれなくなるため、廊下やホールを介して展示室を接続する廊下接続形式（中央ホール廊下型）の平面形式も生まれた。

20 世紀に入ると、モダニズムの潮流が広まる中で、「成長する美術館（1939）」というコンセプトに基づきル・コルビュジェが設計した国立西洋美術館（東京／1959）、都市における高層型美術館として計画されたニューヨーク近代美術館 MoMA（1939）、アトリウム型展示空間を特徴とするフランク・ロイド・ライト設計のソロモン R. グッゲンハイム美術館（ニューヨーク／1959）、ユニバーサルスペースを利用した展示空間を特徴とするミース・ファン・デル・ローエ設計のベルリン新国立美術館（1968）、展示だけでなく、さまざまな表現メディアを先駆的に導入した黒川紀章設計の国立民族学博物館（吹田市／1974）など、博物館・美術館建築の多様な展開が見られるようになった。

(2)

近年の博物館・美術館における新たな観点や可能性については、以下のような動向が見られる。

- ①展示品を展示するための空間ではなく、空間自体が展示品となり体験的に鑑賞できるなど、展示空間の多様化が見られる。金沢 21 世紀美術館（妹島和世・西沢立衛設計）のスイミング・プール（レアンドロ・エルリッヒ作）、Blue Planet Sky（ジェームズ・タレル作）、地中美術館（安藤忠雄設計）のオープン・スカイ（ジェームズ・タレル）などがある。
- ②博物館・美術館を単なる展示施設とするのではなく、地域のランドマーク、人びとのコミュニケーションの場として計画する、開かれたミュージアムという考え方が見られる。エントランスホールを一般に開放し、大きなアトリウム空間にレストランを設け、都市の広場的空間を提供した国立新美術館（黒川紀章設計）などがある。
- ③博物館・美術館を地域との関連、地域的な広がりの中でアート・サイトとして計画する動向が見られる。瀬戸内海の直島・豊島・犬島を舞台に展開するベネッセアートサイト直島などがある。
- ④博物館・美術館を都市活性化の起爆剤として企画、計画、設計する動向が見られる。スペイン・ビルバオ市にフランク・O・ゲーリーが設計したビルバオ・グッゲンハイム美術館（1997）などがその例である。
- ⑤地域全体を巻き込んだ美術・芸術の祭典として企画、計画される形式が広まってきている。ベネチア・ビエンナーレ、ミラノ・トリエンナーレ、大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレなどがその例である。
- ⑥エコロジー（生態学）とミュージアム（博物館）をつなぎあわせたエコ・ミュージアムという考え方に基づく博物館のあり方を目指す動向が見られる。エコ・ミュージアムは 1960 年代後半、国際博物館会議 ICOM の初代ディレクター G.H.リヴィエールが「地域の人びとが自らの地域社会を探究し、未来を創造するための家としての博物館」というコンセプトに基づき提唱したもので、一定の地域において、住民参加によって、地域で受け継がれてきた自然、文化、生活様式を含めた環境を、総体として持続可能な方法で研究、保存、展示、活用していくという理念と実践の方法である。博物館として明確な形態があるわけではなく、さまざまな取り組みやかたちが可能である点が特徴である。

以上のような動向をふまえ、私はこれからの博物館・美術館の建築計画的な可能性については、参加、デジタル技術、コミュニケーションなどをキーコンセプトとすることが考えられるのではないかと思う。博物館、美術館が単なる展示物を鑑賞する空間ではなく、展示物を通してこれからの社会、世界、地域の未来を考え、意見交換や議論ができる場になっていくという方向性である。デジタル技術を駆使することにより、世界の様々な博物館・美術館の展示物はヴァーチャルに鑑賞、体験することが可能であり、すでにデジタル博物館、デジタル美術館と呼ばれるネット上のサイトも多数設立されている。既存の博物館・美術館では鑑賞方法が限られているが、ヴァーチャルな博物館、美術館では展示物のデータの活用方法によっては鑑賞者の多様な関心に応えられる鑑賞方法も可能となるだろう。そのようなヴァーチャルな鑑賞、体験が個別にまた集団的にもできる空間と設備を備え、鑑賞に集中したい人はそれぞれの

興味によりこれまでとは異なる鑑賞体験が得られ、また一方でその場に集まった人々やオンラインでつながった人々により、社会や地域などさまざまなテーマのもと、参考になる展示物を共有しながらシンポジウムやフォーラム、体験イベントなどを実施できるという施設がこれからの博物館、美術館の新しいあり方の一つになると考える。それは特定の物理的な展示物のために計画される空間ではなく、さまざまな展示物のヴァーチャルな共有とコミュニケーションが同時に成立し、進行できる空間として計画されていくことになるのだろう。

問題 3

(1) 以下の中に含まれるキーワードなどが含まれていること。

- ・土地区画整理事業は、道路、公園、河川等の公共施設を整備・改善し、土地の区画を整え宅地の利用の増進を図る事業
- ・土地区画整理事業では土地の利用増進を図るため土地の再配置を行う。その際に、従前の土地に対して新しく置き換えられた土地を「換地」という。
- ・公共施設が不十分な区域では、地権者からその権利に応じて少しずつ土地を提供してもらったことを「減歩」といい、道路や公園などの公共用地が増える分に充てる。
- ・地権者においては、土地区画整理事業後の宅地の面積は従前に比べ小さくなることもあるものの、都市計画道路や公園等の公共施設が整備され、土地の区画が整うことにより、利用価値の高い土地が得られる。

(2) 土地区画整理事業を理解し、既存商店街を活性化させるため、周辺の商業、福祉、文化等の各種施策と連携しつつ、新たな機能により地域をさらに向上させる提案を求める

問題4

以下のそれぞれの点について、箇条書きしたキーワードが含まれていること。

1：著者の主張

- ・生き生きとした都市には、①用途が混在すること、②街区が短く曲がり角が多いこと、③新旧の建物が混在すること、④適切な人口密度を保つこと、という4点が大切である。
- ・街路を歩く人たちが安全性を担保している。地上階の用途は歩行者にとって魅力的なものであることが望ましい。
- ・公園は、歩行者の多い街路に近い場所にあれば効果的な役割を果たすこともあるが、そうでなければ人気がなく危険な場所になる可能性が高い。
- ・その他、出題著作においてジェイコブズの主張した点が記述されていること。

2：21世紀のまちづくりにとって参考になる点

- ・人々が対話し、つながり、お互いに顔見知りになることができる場を用意すること。
- ・街路や建物の1階など、多くの人の目に触れる場所で市民が活動すること。
- ・大規模な再開発を避け、古い建物をリノベーションしながら活用すること。
- ・曲がり角の多い路地などを大切にすること。

3：著者の理論の限界点

- ・行政主導の都市再開発と闘ったジェイコブズの理論は、民間企業のタワーマンション開発や大規模開発などを想定していない。一見、魅力的に感じる路地や小売店を集めた民間大規模開発が、巨大資本の商売のために作られた空間（お金を払わなければ居られない空間）ばかりになってしまうことや、それを利用者がほとんど気づかないように空間が作られてしまうことなどは、ジェイコブズの想定を遥かに超えた都市の居心地の悪さを実現させてしまっている（居心地が悪いと気づかないように居心地の良さそうな空間を準備してしまっているが、お金を持ち合わせない人にとっては排他的な状態を作り出している）。
- ・インターネットで買い物ができるようになり、それがとても便利になってしまう社会を想定できていないこと。それでもなお、地域の小売店を使い続けるために何が必要かについては言及されていない。